パイロット事業としての「就活・北海道フェアー」を実施して…

日本社会事業大学同窓会北海道支部
学部１５期　**髙　田　　哲**

１．フェアー実施の経緯

現在、北海道には約２００人の同窓生がいます。そして、その多くは、社会福祉現場はもとより、教育現場や公務員等として働いています。また年齢的にみても、その職場で中核的役割を果たしている人が数多くいます。

同窓会北海道支部（通称「北海道同窓会」）は、諸先輩たちの並々ならぬ努力の結果として、３０年以上前から年に２回の同窓会を定期的に開催してきています。

そのひとつは、新年会です。これは、毎年１月の下旬に交通の利便が良い札幌市内で開いてきました。道内同窓生の交流及び交歓が主目的でした。しかし、「学びの場をもっと増やしていこう」という現会長提案の許、「新春セミナー」と改称しました。これにより、これまでの交流及び交歓だけではなく、その時々の社会福祉等に関する情勢等をみんなで学べる場、という位置付けをするようになりました。

もうひとつは、晩夏から初秋にかけて開かれる「秋季セミナー」です。その名のとおり、道同窓会員の組織的研修の場です。近年は、本学や本学同窓会の協力を得て、「日社大市民公開セミナー」として、北海道内４ブロック（道央、道東、道南、道北）が毎年分担し、そのブロック内地域において実施しています、また、セミナーを開催する際は、本学同窓会だけではなく、地域の社会福祉を始めとする様々な関係団体、関係者及び他大学の卒業生等にも呼びかけをして共に運営及び実施をしてきています。

こうしたことを通じて、「社会福祉リーダー」としての社大同窓生の役割を果たすとともに、各地域における地域づくり、仲間づくりを積極的に推し進めてきました。

北海道全体としての現在の深刻な問題は、人材難です。社大卒業生の立場で云うならば、「なかなか社大生が北海道に就職しない」ということになります。これは、現役社大生中の北海道出身者はそれほど多くはない、という現状とも相俟っています。

北海道の社会福祉実践現場においては、①社会福祉理念に基づく、②社会福祉実践ができる、③優れた人財（人材）を強く求めています。そこで、社大生及び関東圏の社会福祉系大学に学ぶ学生に、「北海道を知ってもらおう」、その上で、「できれば、北海道に就職してもらおう」と発案し、このたびのパイロット事業を開催することにしました。

こうした発案の背景には、単に「より良き人財を北海道に呼ぼう」という願望があるだけではなく、北海道のみならず他県においても同様の課題があるだろうから、「まずは北海道が先行実施し、然る後には他県と共同実施して、社会福祉現場で活躍できる社大生を地方で増やしていこう」という狙いがありました。

また、「母校愛」ということを考えたとき、社大卒業生である同窓生ひいては同窓会組織と、教職員の組織である本学当局との間には、かなりの認識の開きがあるように感じています。具体的には、本学当局は、社大の将来や学生及び同窓会支援をどう考えているのか、という正直な疑問が同窓生の中にはあるのです。

一定年齢以上の同窓生は、社大生であったこと

を今でも誇りに思っており、そうした矜持の許で社会福祉実践をしてきたという自負心があります。したがって、こうした伝統を、できれば清瀬世代になってからも引き継いでもらいたい、と強く願っています。

そこで、このたびのパイロット事業を通じて、同窓会と本学が一致協力することで、現役学生の支援及び卒業生支援を積極的の行う切っ掛けづくりをしてほしい、と考えたのでした。

道同窓会としては、かなり周到な準備をしました。それに応えてくれたのは、伊藤同窓会顧問と木村副会長でした。また、ご両人のご尽力の許、本学事務方も万全の協力を惜しまず、当日を迎えることができたのでした。

２．両日の成果

伊藤顧問、木村副会長及び本学事務方のアドバイスを受けながら、開催に関する広報活動、会場設定（Ａ棟１階ロビー）を行い、パネルやブースの設営もしました（正しくは、「してもらいました」)。特に広報にあたっては、社大生だけではなく、伊藤顧問の提案により関東圏の１０数大学にも案内チラシ（別記）とポスターを配布してもらいました。

その上で、今回はパイロットということもあって、「盛大に、かつ多彩に」との位置付けをし、道同窓会としては道内会員に積極的に参加呼びかけをし、結果、フェアー参加者は６名になりました。そのメンバーは、村上道会長、木村道副会長、金子道事務局長、瀬戸ブロック幹事、塚本会員、それに髙田ブロック幹事です。特に、塚本さんは木村さんの法人の職員であり、８年前の卒業生であるため、学生との面談には不可欠、と木村さんが判断した人材でした。また、それぞれのメンバーは法人の要職にある人ばかりであるため、今回のフェアーにあたっては、単なる「就職説明会」ではなく、「場合によっては採用の方向性を決定しても良い」というくらいの腹構えを持っての参加となったのでした。

６月２５日（土）の昼休みになるや否や早速、学生が遣って来ました。

一般の就職説明会であれば、集団もしくは列を成すために時間を切っての面接となる処です。しかし今回は、「まず学生自身を知り、然して北海道を知ってもらう」という主旨から、時間制限を敢えて設けず、お互いが充分に話し合える体制としました。結果、一番長い学生は１時間近くの面談となりました。

その後も、「来ないねぇ」と言っていると、来てくれ、来てくれると、次が仲々来ないといった状況でした。初日は最終的に、５人の面談で終了となりました。

面談後は、参加メンバーと本学メンバーとで参加学生の分析もし、相互交流もしながら、翌日に臨みました。

２６日(日)は、本学事務方のアドバイスに従い、当初の１０時から１３時の時間帯を、昼休みを中心にした１１時から１４時に実施することに変更しました。１０時３０分よりの見世開き後には、前日同様に、ボツボツと学生の出入りがありました。昼休みになると、フォーラムに参加していた学生たちが会場から降りてきて、我がメンバーも積極的にチラシ配り、声掛けをしました。本学の金子教授が「仕掛け」をしてくれたことも功を奏しました。

こうした結果、２日目は１０人の学生が面談に応じてくれ、２日間では１５人の学生が参加してくれたのでした。

１）面談した学生の分布は、以下のとおりです。

① 学生内訳…社大生１５人、他大学生０人

② 学年内訳…１年生２人、２年生３人、３年生５人、４年生４人、院生１人

③ 男女内訳…男性９人、女性６人

④ 希望分野…高齢２人、障害２人、子ども５人、公務員等２人、他４人

⑤ 出身地　…道内４人、道外者１１人（うち関東圏６人)

２）面談の特徴は、以下のとおりです。

低学年は、北海道という地域を含めた基本的な

情報収集が主であり、学年が上になるにつれ、具体的な分野についての情報を訊きたいという結果でした。先に書いたとおり、時間制限を設けなかったため、学生もスタッフもお互いの情報を出し合いながら、めざすべき内容を語り合えたのではないかと思います。

今回の開催にあたっては、事前に道内の同窓生から求人票を送ってもらい、それを一覧表化、ファイル化したり、手作りの北海道地図（模造紙大、写真参照）を作成して就職先の位置関係（札幌からの距離や移動時間など）を明確にしたりの努力もしたため、よりイメージを持った話し合いができたのではないかと総括しています。

他方、関東圏に住みながら、北海道において就職活動をするということのハードルは高いように感じました。つまり、学生が関東圏と同じくらいに北海道で就職したいと思っていたとしても、北海道で就職活動をするためには、時間もお金もかかるので、関東圏ほどには気軽に見学や面接に行くことができないといった状況があります。またそもそも、北海道の就職情報が本学に入ってこないというデメリットもあるようです。結果として、学生の就職の選択肢を狭めてしまう現状があるのも事実だったのです。

今回の１５人の学生のうち、「今後とも連絡を取り合おう」と確認した学生も数人おり、また面談スタッフから、「○○さんは是非、北海道に来てもらいたいね」という期待も寄せられました。今回、面談した学生たちは大変素直で前向きであり、良い印象をスタッフに与えてくれました。「まさに、社大生だね」との声も聴かれました。年に開きはあれど、やはりきちんと社会福祉を学び、より良い社会福祉実践をしたいというこちら側の意欲は伝わったでしょうし、学生からも伝わってきたのでした。

３．今後の抱負として

今年の取組は、パイロット事業、つまりは「まずは遣ってみよう」事業でした。ただ、本学及び本学同窓会のご厚意により、社大福祉フォーラム２０１６の自主企画事業に位置付けをしてもらったことは極めて大きな意義がありました。因みに、東京支部は、「ソーシャルワーカーへの途」という、よりダイナミックな企画をしていたことに敬意を表したいと思います。

また、２５日に開かれた同窓会幹事会においても、この事業の趣旨説明や経過、及び来年度以降の共同開催の呼びかけをさせてもらいました。

道同窓会は、先に書いたとおり、同窓会活動として３０年以上に亘って、年２回のセミナーを着実に開催してきています。他方、そもそも北海道から社大をめざす学生は多くはなく、北海道に就職したいという学生は更に少ないようです。そのため、同窓会活動そのものも先行きは決して明るくはありません。

しかし、「社大卒業生」という誇りはそれぞれが持っていることから、自らの現場及び北海道の社会福祉現場をより良いものにしたい、という願いは常に持ち続けています。このため、年２回のセミナー開催の際には、とりわけ若い人に積極的に声掛けをして、同窓会活動への参加を呼びかけてきました。また、他大学卒業生を含む様々な人たちにも呼びかけをして、セミナー活動を通じて、北海道の社会福祉活動の活性化が少しでも図れるような努力をしてきたつもりです。

加えて、本学や本学同窓会の動きはもとより、道同窓会員それぞれが置かれている現状や熱い思いについての寄稿（「社会福祉随想リレー」）などを掲載した「アガペ」（標題は伊藤顧問）を年４回発行することで、同窓会員の繋がりをより強固なものにする努力も払ってきています。

そうした取組を土台として、今回の事業は、来年度以降の本格的フェアー開催にあたっての第一歩となるものでした。この成果を踏まえて、来年度以降は他県支部とも共催して、この時期に「就活・全国フェアー in 社大」を開催したいと熱望しています。ついては、これからの本学及び本学同窓会の協議課題として、①上記フェアーの開催を前向きに検討、実施していただければ幸いです。

また併せて今後、②本学が県支部単位での求人票の送付依頼を毎年行うことも何とぞ検討、実施していただければ有り難く思っています。

道同窓会では更に、今回のことを通じて、次のようなことを構想しています。

① 地元の高校生等が社大をめざす場合、「同窓会県支部推薦」という形を取って、全国の同窓会組織を通じての社大入学を実現してほしい。

② 全国フェアーが社大内に於いて毎年開催できるならば、この場を「県支部主催の法人就職試験の場」と位置付けることを実現してほしい。

③ 学生の就職にあたって、「社大推薦」という形で、社大生が各県の社会福祉現場で就職できる特典を設けることも実現してほしい。

いずれにせよ、社会福祉実践の中核である社大生が全国各地で先進的活躍をしてもらうためにも、本学及び本学同窓会の課題として、こうした大胆な実施を打ち出して欲しいと切望しています。

「社会福祉現場で働きたい」という社会福祉諸理論を学び実習した学生（社大生及び少なくとも関東圏の社会福祉系大学の学生）が、「是非、北海道で社会福祉実践したい」となるように、道同窓会員はこれからも様々な取組と提言をしていきたいと考えています。また、そのための限りない学生サポートも惜しまないつもりでいます。

来年の６月､さらに多くの県との共催による｢就活・全国フェアー in 社大」でまたお目にかかれることを切に願っています。

さいごになりましたが…

このたびの北海道フェアー実施にあたり、同窓会の伊藤顧問、木村副会長及び校友室、また本学事務局のみなさんには本当にお世話になりました。また、フォーラムを通じて、懐かしい先輩や後輩たちにお目にかかることもできました。この２日間は、北海道勢にとっても大変貴重で、かつ至福の時間となりました。改めて御礼申し上げます。

なお、本来このフェアーは、北海道同窓会企画（本学同窓会との共同開催）であるため、この報告もまた、その責任者である村上道同窓会会長もしくは金子事務局長が起案すべき処です。しかし、ご両所ともに業務繁多であるため、会長の指示により、実務担当の髙田が報告することとしたことを何とぞご承諾くださいますようお願いします。

北海道フェアー

あなたも北海道で働きませんか

北海道には現在、２００人近い日社大卒業生が同窓会員として暮らしており、その多くは社会福祉現場で働いています。

また、かなりの人たちは、理事長、施設長、管理者など、その職場で重責を担っています。

こうした先輩たちが、あなたに、「是非、一緒に働きましょう！」と呼びかけるのが、この「就活・北海道フェアー」企画です。

学内学会が開かれている当日、社大生はもちろん、社会福祉を学ぶ他大学のみなさんも、北海道について、また北海道の社会福祉現場について、理解を深めてみませんか。

就　活
in Hokkaido

と　き：6月25日(土)午後＆26日(日)午前中
ところ：日本社会事業大学Ａ棟１階ロビー
問合せ：日社大校友室（０４２－４９６－３０５３）
日社大北海道同窓会（０１３４－５１－２３１１）

主催：日本社会事業大学同窓会＆同窓会北海道支部